

県立近代美術館エントランス ロダンの「カリアティードとアトラント」

オーギュストロダンは、フランスの彫刻家。
(フランス語: François-Auguste-René Rodin
(1840年11月12日 - 1917年11月17日)

県立近代美術館のエントランスホールに、
ロダンの《カリアティードとアトラント》という
3本の柱それぞれに像が刻まれた巨大な
彫刻作品が据えられています。

階段を上ると、上から見下ろすこともでき
ます。 カリアティードとは女性人像柱、アトラントとは男性人像柱を意味します。
近世になると、カリアティードを建物のファサードの装飾として取り入れたり、暖炉の
装飾に取り入れたりする例が、見られるようになりました。



この女性人像柱を中心、男性人像柱を両側に置いた三体の像は、実際に、
ベルギー、ブリュッセルのアンスパック通り(Hunspach)という目抜き通りのビルの
二階に、据えられていたものです。

この作品は大理石のように見えますが、細かく碎いた石を漆喰と混ぜたものを使用
したもので、技法的にも珍しいとされています。

威厳をもった大胆で力強い肉体表現には後の作品に継承、発展していく要素が
含まれており、傑作《青銅時代》(1876年)と同じ時期に制作されたもので、ロダン
研究の上でたいへん貴重なものとされています。

普仏戦争がなければ、彼はベルギーで大型彫刻の修行をすることではなく、後世の
ロダンはなかったかも知れません。

多くの若い芸術家が普仏戦争の影響で生活が苦しくなり、パリを離れ、光の環境が
違う国や地域で、絵の勉強を続けます。

その普仏戦争でパリを離れた経験が、画風を大きく変えた画家も多いようです。
その代表が、彫刻でロダン、絵画でモネだったかも知れません。

本作品製作のころまでの、前半生について、Wikiから抜粋します。

1840年、パリ在住の労働者階級の子として生まれた。

1860年、パリで、ロダンは建築装飾の下彫り工として、下積みの苦労をする。
ロダンは学業継続を望んでエコール・ボザール(グラン・エコール)に入学を志願
した。ロダンは同窓生をモデルにした塑像を提出したが、ボザールからの評価は
不合格だった。諦めずに翌年と翌々年も塑像を出し続けたが、ボザールからは
全く相手にされなかつた。当時のボザールは技術的な要求水準がさほど高くなかつ
たとされ、数度にわたって入学を拒否されたことは非常に大きな挫折といえた。

ロダンが入学を拒絶された理由は、ボザールでの新古典主義に基いた彫刻教育と
異なる嗜好で作品を作っていたことも一因かもしれない。

入校を諦めたロダンは室内装飾の職人として働きながら、次の道を模索していた。
1863年、ロダンに追い討ちを掛けたのが姉マリアの死だった。姉の後を追うように

修道院に入会したロダンは修道士見習いとして、美術から神学へと道を変えようとしたがロダンの指導を任せられたピエール・ジュリアン司教は彼が修道士に不向きだと判断して、美術の道を続けるように諭した。

修道会を離れたロダンは動物彫刻の大家であったアントワーヌ＝ルイ・バリーに弟子入りして、深い影響を受けた。また24歳の時には生涯の妻となる裁縫職人のローズと知り合い、長男をもうけているほか、装飾職人としての労働も再開した。1870年、普仏戦争が勃発すると彼も徴兵対象となつたが、近視であったことから兵役を免れた。それでも戦争の影響で仕事が減って生活が苦しくなり、30歳までロダンは家族を養うだけの稼ぎをとれなかつた。職を求めて新天地に向かうことを決めたロダンは家族とベルギーへ移住して、そこで知り合いの紹介でブリュッセル証券取引所の建設作業に参加した。ロダンは当初は仕事が終われば早々に切り上げてフランスに戻るつもりだったが、様々な理由から6年間滞在を続けた。

『カリアティードとアトラント』は、このころの作品。

実際に、ベルギー、ブリュッセルのアンスパック通り(Hunspach)という目抜き通りのビルの二階に、据えられていた。近世になると、カリアティードを建物のファサードの装飾として取り入れたり、暖炉の装飾に取り入れたりする例が見られるようになった。内装に用いるという新たな使用法は古代にはなかつたものである。

ベルギー時代は彼の創作活動において重要であつたと考えられている。

彼は装飾職人として独学で彫刻の技法を修練していたが、展覧会用の作品を作る余裕がなかつたために、誰も彼が彫刻家としての夢を抱いていたことを知らなかつた。

1875年、職人の親方との関係が悪化したこともあり、ベルギー滞在中に生活費を節約して貯蓄を続けていたロダンはローズを連れて、念願のイタリア旅行に出かけていった。

そこで目の当たりにしたドナテッロとミケランジェロの彫刻に衝撃を受けたロダンは、多大な影響を受けることになった。

彼は「アカデミズムの呪縛は、ミケランジェロの作品を見た時に消え失せた」と語っている。

ベルギーに戻ったロダンは早速イタリア旅行で得た情熱を糧に『青銅時代』を製作、十数年ぶりに彫刻家として活動を開始した。

1877年の『青銅時代』は、ロダン独自の人間の生命、情熱の造形化をはたした最初の作品である。



『青銅時代』